
鉾山研究会

ニューズレターNo.88

2012年3月30日

- 1 研究大会・総会のお知らせ
- 2 旧年度の活動報告と新年度の活動方針
- 3 書評
- 4 事務局からのお知らせ

鉾山研究会 連絡先

会長 村串仁三郎

〒270-0127 流山市富士見台2-5-16-13-401

電話・ファックス 0471-52-8952

メールアドレス；

事務所 国学院大学、若木タワー第913号、菅井益郎研究室

〒150-0011 渋谷区東4-10-28

1 研究大会・総会のお知らせ

日時 2012年4月21日 1時—5時

場所 法政大学ボアソナードタワー19階、D会議室
(例年の場所と違いますので、ご注意下さい)

研究大会の部 1時—3時30分

1 「たたら製鉄その操業と環境について」映像を使って

長島節五

2 a「稼働中の産業遺産登録を行う場合の日本政府における取扱いについて(釜石、足尾等)

b「大正初期における鉱山(約40)写真の発見と公開」

小野崎敏

3 『宇宙論』近著を紹介しつつ

藤田貢崇

総会の部

1 昨年度の活動報告

川俣修寿

昨年度もおおむね従来道理の活動をおこなった。

会誌『鉱山研究』は、計画通り1回発行できた。

内容的には、充実したもので、会の実力以上のできで、大幅な赤字を生んだ。

「定例研究会」は、2011年4月23日の総会時の研究大会、7月9日、10月22日、の3回で、回数的にはやや低調であったが、内容的には充実したものであった。

4月23日の研究報告(於法政大学、1—4)

1 「近代新潟県の油田開発」、品田光春

2 「産業革命以降銅山製錬が自然環境と社会にもたらした影響と現代的課題」

島崎光晴

3 「自著『近代日本における鉱物資源開発の展開』を語る」、原田洋一郎

4 『写真でみる中国炭坑訪問の記録』、寺本孝広

7月9日の研究報告(於法政大学、2—5時)

「足尾銅山のデータベース化について」、藤田貴崇、小出五郎

10月22日の研究報告(於法政大学、2—5時)

1 「円高と鉱物資源の価格変動について」、平塚尚護

2 「旧産炭地研究会の活動について」、中澤秀雄

3 「幕府直轄鉱山、岩見銀山の存続とその周辺」、原田洋一郎

「鉱山の映像を見る会」については、3回おこなった。

第30回は、2011年7月23日(土)国立オリンピック記念青少年総合センターで「太平洋炭鉱」をテーマに、1・「石炭のある町 釧路」、シリーズ「音のある風景」、NHKBSHi, 10分, 2009(平成21)年5月11日放送ほか。2・「国産エネルギーの担い手 太平洋炭鉱」、HBC映画社(現 HBCフレックス)制作, 太平洋炭礦, 27分, 1977(昭和52)年。3・「運炭列車(坑外軌道1989)」, 福士正明, 7分, 1989(平成元)年。

4・「終りなきイノベーション」, 太平洋炭礦製作, 18分, 1997(平成9)年。5・「生き残りへの模索～岐路にたつ太平洋炭鉱～」, シリーズ「北海道クローズアップ」, NHK札幌放送局, 25分, 1999(平成11)年5月29日放送。6・「黒いダイヤが燃えている～資源警報！石炭を確保せよ～」, シリーズ「日経スペシャル ガイアの夜明け」, テレビ東京, 正味約45分, 2007(平成19)年1月23日放送。7・「クアンハイン石炭会社：5年間にわたる建設及び発展」30分, 2008年4月(但し、機器の関係で上映はできなかった)。

第31回は、2011年12月17日(土)國學院大學若木タワー5階509教室で「近年のビッグニュース―チリの鉱山事故に関連と山本作兵衛の炭坑画が今年5月にユネスコの世界記憶遺産関係」をテーマに、1・「チリ 33人の奇跡：救出を支えたテクノロジー」(原題 RESCUED: The Chilean Mine Story. Discovery Channel, 2010年)ディスカバリーチャンネル, 2011年1月6日放送, 約46分。2・「NHKスペシャル 奇跡の生還～スcoop チリ鉱山事故の真実」NHK総合テレビ, 2010年10月24日放送, 約49分。

3・事故のあったサンホゼ鉱山の近くの銅山を取材した日本のバラエティ番組。

4・「潜入！チリ銅山 超危険！地下250mの現場！」(「潜入！リアルスコープ」フジテレビ, 2011年1月15日放送)約16分。

5・「日曜美術館 よみがえる地底の記憶～世界記憶遺産・山本作兵衛の炭坑画」NHK Eテレ, 2011年9月11日放送, 45分。6・「クローズアップ現代 炭坑(ヤマ)が“世界の記憶”になった」NHK総合テレビ, 2011年7月28日放送, 26分。

第32回は、2012年2月18日(土)、國學院大學渋谷キャンパス2号館4階02教室でフランス映画「ジェルミナル」クロード・ベリ監督(1993年)。原作はエミール・ゾラ、舞台は19世紀末の北フランスの炭鉱、鉱夫たちの労働運動を背景とするヒューマンドラマ。

「海外鉱山文献読書会」について、11回おこなった。

「海外鉱山文献読書会」は、Spence, Clark C.「Mining Engineers and the American West: The Lace-Boot Brigade, 1849-1933」1970. Reprint. Moscow, Idaho: University of Idaho Press, 1993. をテキストに2011年は、4月6日、5月25日、6月29日、7月27日、8月24日、9月28日、10月19日、10月26日（10月は2回集まり、11月はなし）、12月5日、1月18日、2月15日、3月は未定です。原則月1回、年12回です。

会場は、いずれもGIOオーガニックカフェ（港区港南1-9-36 アレア品川2F）。

「現地見学会」については

「現地見学会」については、水口為和、村田淳会員が計画した「第10回伊豆鉱山（下田、河津方面）」2011年3月12、13日の巡検は、東日本大震災などの影響で中止となり、2012年3月10日（土）から11日（日）（1泊2日）に変更になった。（予定）

見学場所：①水晶沢鉱山 ひ押しあるいは立て入れ坑3箇所②小土肥鉱山 試掘のためのひ押し坑2箇所③沢田鉱山 ひ押しあるいは立て入れ、排水坑、露天掘りなど約13箇所④佐賀野鉱山 ひ押しあるいは立て入れ坑5箇所。

「諏訪鉄山、金鶏鉱山（長野県）」は、2011年10月1日（土）～2日（日）で見学場所は①諏訪鉄山（金堀場、石遊場、明治鉱区など）②金鶏鉱山（露天掘り跡、堤跡、千軒平、選鉱所跡、田坑、鶴坑、亀坑など）③そのほかの予定で村田淳会員が計画したが、参加希望者が少なくやむなく中止となった。

2 新年度の活動報告

村串仁三郎

本年度も昨年度並みの活動を行うことを計画している。

「定例研究会」、総会時の研究会を含め、3. 4回を開催したい。

「鉱山の映像を見る会」も3. 4回を開催したい。

「海外鉱山文献読書会」も月1回ペースで続行。

「現地見学会」は困難もあるが、出来る限り実行をはかりたい。

会津の鉱山跡巡検についての提案

一昨年は旧釜石鉱山を訪れたが、今年は被災地福島を、激励を兼ねて訪れてはどうかという意見があり、佐藤一男会員のホームグラウンド、会津を訪れ、軽井沢銀山跡などをたずね、佐藤会員から、会津の鉱山の話伺おうと事務局で考えました。佐藤会員から歓迎の意向が来ましたので、総会当日、9月頃の実施計画案

を提案したいと思います。

会費値上げの提案

数年前、会誌の発行もできず、瀕死の状態であった会運営は、何とか順調にすすみ、会誌の発行が軌道に乗り、投稿者も多く、内容も充実してきています。数年前には、会費の残高が異常に膨らんでいたこともあって、2008年度には、残金を消化するために会費をゼロとし、その後会費を3000円に値下げし、その後4000円に値上げして運営してきましたが、2010年度は初めて15万円ほどの大幅な赤字を計上することになりました。

事務局で議論した結果、会誌の発行が順調にすすんでおり、2011年度も、会誌発行額が35万円ほどになり、10万円程度の赤字をだしそうです。4000円会費のままでいけば、赤字が累積して、財政破たんに陥りそうです。事務局としては臨時のカンパ要請もノーマルではないと判断しました。そのため会の財政を正常化するために会費2000円の値上げを提案することにしました。事務局としては、6000円会費は、鉾山研究会の活動からみて、だとうな水準であると認識しています。会員の皆様方のご理解をお願いします。また2013年度には赤字もなくなり、財政が正常化しますので、会誌の掲載料も不要になることが予想されます。

3 会計報告

久保敦子

2011年度会計報告案

2012年3月29日

（これは総会までの仮の案です。総会までに監査をうけた報告をする予定です）

収入

くりこし金	3、226円
会費 4000円×57名	228、000円
会誌掲載料	79、000円
投稿者による会誌買い取り	48、000円
赤字カンパ	85、000円
会誌売り上げた他（誌代会員分を含む）、	22、274円
収入合計	465、500円
10年度赤字借入金	149、304円

支出

印刷費（ニューズレター）	4、800円
会誌発行代	367、106円
郵送費（ニューズレター、会誌など送料）	23、400円
事務費	5、904円
活動補助費	6、000円
雑費	14、020円
支出合計	421、230円

2011年度収支バランス

収入合計465、500円－支出合計421、230円
＝黒字44、270円

2011年総合収支バランス

黒字44、270円－昨年度債務返済149、304円
＝11年度赤字105、034円

2012年度予算案

収入

会費	6000円×63名	378、000円
会誌掲載料		70、000円
投稿者による会誌買い取り		40、000円
収入合計		488、000円

支出

印刷費（ニューズレター）	5、000円
会誌発行代	350、000円
郵送費（ニューズレター、会誌など送料）	25、000円
事務費	5、000円
活動補助費	6、000円
支出合計	391、000円

2012年度収支バランス

収入合計488、000円－支出合計391、000円
＝黒字97、000円

2012年度最終バランス

黒字 97、000円－11年度赤字 105、034円

＝赤字 8、034円

3 書評

佐藤一男『古河市兵衛と会津の軽井沢銀山』（平成22年刊、発行者
佐藤一男） 久保敦子

会津の鉱山なら佐藤一男氏、佐藤一男氏なら会津の鉱山と言われるくらい、その名を知られたエキスパートの貴重な労作である。

会津には、三百を越す鉱山操業の実績があるが、ほとんどその痕跡を残していない。鉱山王国とまで言われた会津の鉱山の中で「軽井沢銀山」は、歴史も古く（永禄元年発見）、鉱量も豊富であった。

軽井沢銀山の歩みに始まって、銀の品質、銀山街道、そして鉱山と共に生きてきた人達について述べ、藩政時代の鉱山政策についても触れている。

又、古河市兵衛と軽井沢銀山について、古河市兵衛は大変鉱夫達を大切に扱ったと述べ、従業員達も市兵衛を敬愛していたという。

友子（ともこ）の組織と誕生についても述べられている。徳川家康をかくまった駿河の国、日影沢金山の明石五郎が、家康から「山法五十三ヶ状」を与えられ、坑夫を優遇するべく、数々の法が認められた。その中に、名字や帯刀を許す、とあったため山師達は大変喜んだという。この「山法五十三ヶ状」が発展して友子の組織が全国的に発展した。

友子は、坑夫を養成したり、日常生活の相互扶助を行なう組織となり、友子関係は「坑夫出世取立式」で加入が許された。親分、子分の関係で結ばれ、相互の助け合いは、戦後の労働基準法や健康保険法などに発展したという。

佐藤氏や、筆者らは、たびたびアメリカの鉱山遺構を見学したが、このような組織があったということは聞いたことが無い。それ故、アメリカでは、現在でも国民健康保険などの法律が成立していないのかもしれない。

友子の制度は、草倉鉱山において古河市兵衛によって巧みに利用され、大発展を遂げた。坑夫達は、所帯持ちは長屋に住み、単身者は飯場に住み、「何々組」と呼ばれた。筆者が子供の頃、峰之沢鉱山の飯場が天龍川

沿いにあり、度々遊びに行った記憶がある。ガラスが破れた所には厚紙が貼ってあり、男物の下着や脚絆が部屋の中に干されていた。

大島高任が明治十四年頃、オーガスチン法（塩和精錬法）で、小坂鉱山において優秀な成績をあげ、これを知った古河市兵衛も軽井沢鉱山でこの方法を採用した。

軽井沢鉱山の鉱害防止対策についても触れている。ここでは、重金属汚染の恐れがあったため、金属鉱業事業団と福島県が共同して水質調査や簡易地表測量、水量調査などを行っている。鉛、亜鉛、カドミウムなどが排出基準値を超えていたようであるが、そのままこれらの水は水田、各種用途に利用されていた。稲や農作物への被害はどうだったのだろうか。

この書の特徴は、至る所にコラム覧があり、鉱山用語の由来、行事、しきたり等が丁寧に解説されている。また、軽井沢鉱山の貴重な写真や図が至る所に挿入されており、著者のこの本製作の熱意が感じられる。

著者の佐藤一男氏は、アメリカ鉱山史会議の年次総会にたびたび出席されており、アトラクションの鑿岩機操作の競技会に参加されて優勝する等、日米の親善にも尽くされている。まだまだ意欲的に著作活動が続けておられるようである。

（本書入手希望の方は、会津若松市東千石 3－4－1、佐藤一男、に問い合わせ下さい）

早川征一郎著『イギリスの炭鉱争議（1984－85年）』（お茶の水書房、2010年10月）
村串仁三郎

法政大学で同僚であった早川征一郎氏の労作『イギリスの炭鉱争議（1984－85年）』を読む機会があった。

私が最初にイギリスに留学したのは、1987年4月であったが、それに先立つ1984年4月に早川氏は、イギリスに留学していて、1984春から勃発していたイギリスの炭鉱争議に遭遇していた。争議の終焉した2年後にイギリスに行った私にとってこの大争議は、大変興味深い、またイギリスの労使関係を考えるうえでも大きな関心事であった。一昨年早川氏から先の本が私に送られてきたのだが、たなざらしのままであった。わが研究会から多くの受賞者をだした法政大学経済学部同窓

会の森嘉兵衛賞に、早川氏が応募してきたので、私は、森嘉兵衛賞の審査委員をやっているので、早川氏の本を読まざるをえなくなり、私にも大きな関心事であったイギリスの炭鉱争議について勉強させていただいた。

早川征一郎氏は、新潟で高校卒業後、郵便局に勤務し、1961年末に上京しさらに郵便局に勤務しながら、1962年に法政大学経済学部に入學し、勤勞の中で卒業した。その後1966年に東大大学院経済学研究科修士課程に入って終了し、1968年に東大社研の助手をつとめ、1972年に法政大学大原社会問題研究所員となり、1997年から2003年まで同所長を歴任し、さる2009年に定年退職した人である。

早川氏の専攻された研究課題は、労働問題とくに郵便局勤務の経験もあってか、公務員の労働問題であった。これまで早川氏の研究は、『国・地方自治体の非常勤職員』（1994年、自治体研究社）、『国家公務員の昇進・キャリア形成』（1997年、日本評論社）など、また『国鉄労働組合一歴史、現状と課題』（、1993年、日本評論社）など多数の共著により斯界でよく知られた存在である。

本書は、これまでの氏の研究キャリアからは異色のものであるが、本書作成のきっかけは、早川氏が、1984年4月から1985年9月までイギリスに留学し、そこで1984年から1985年までにイギリスで展開された炭鉱夫のストライキを見聞し、さらにそれを記録（「イギリスの炭鉱争議（1）～（9）」大原社研の雑誌掲載）してきたことである。

早川氏は、定年退職後に新たな研究を踏まえ以前の論稿を改善して新たな論稿を加えて本書として公刊したのである。

本書の内容は、3部構成をなし、第1部は、イギリス全土を震撼させた炭鉱夫の1年にわたる大争議の発生する前段、保守党政府が当時国有化していた炭鉱を民営化し、イギリスでも最も左翼的なNUM（全国炭鉱夫労働組合）を、如何に解体に追い込み、英国病の根源と見ていたこれまでの炭鉱労使関係を根本からひっくり返そうとしていた、サッチャーの政策を明らかにしている。

第2部は、イギリスの炭鉱争議について、発生、展開、終焉のプロセスを簡潔かつ客観的に記述している。この記述は、筆者の早川氏の立場が、ミリタントで左翼的なNUMに同調的であるにも関わらず、イギリスの炭鉱争議の抱えていた矛盾、NUM主流に対する批判勢力、あるい

はNUMの全国的ストライキを全組合員の投票にかけずに、執行部の専断で実行したという問題点、あるいはイギリスの労働組合連合組織のTUC（労働組合会議）や労働党首脳部との対立などについても、はっきり描き出し、結局、争議が、壮大な敗北の終わったことを明らかにしている。

第3部は、炭鉱争議後のイギリスの炭鉱業のたどった経過と争議の位地づけをおこなっている。炭鉱争議後の経過については、争議敗北後にNUM勢力が、NUMに反対する政府に協調的なNDM（民主的炭鉱労働組合）の出現や反NUM勢力サッチャーの政策が実って、急速に力を衰退させていく過程を明らかにしている。また1993年に炭鉱の民営化が実施され、炭鉱業自体が、“スクラップ・アンド・ビルド”政策で、衰退し、事実上炭鉱業が消滅し、争議の主体だったNUMが解体していく過程を明らかにしている。さらに争議の位地づけについては、エピローグ「イギリス石炭産業＝その後とおよび展望」を置いて、本書を締めくくっている。

本書の大きなメリットは、これまで日本ではあまり注目されてこなかった1984－85年の1年わたるイギリスの全国的な大炭鉱争議の全体像を簡潔に、かつ著者のイデオロギー的立場を超えてかなり客観的に描き出したことである。

とかく争議研究には、争議への研究者の心情が入り込みがちであるが、早川氏は、争議を冷静に追及し、彼の言葉でいえば、「記録」していると評価できる。そのため本書は、われわれに、1960年の三池大争議と比較研究する材料を与えてくれている。こまかな問題で、早川氏の研究をさらに評価すべき論点も多いが、ここでは控えておきたい。

なお鉱山労働の研究を長い間おこなってきた評者の立場から、本書の弱点と思われた二、三の論点を指摘しておきたい。

第1は サッチャーが英国病として攻撃し、解体しようとした国営炭鉱内の労使関係の内実が、必ずしも明確に描かれていない点である。イギリスで少しは永く暮らしたことがある者なら感じるイギリス人の働きぶりに英国病といわれた実態があるのかないのか、だから英国病といわれた労使関係（NUMが獲得してきた地下労働という特殊な具体的職場レベルの労働条件やさまざまな既得権利）を具体的に明らかにしなければ、炭鉱争議の本質やNUMの全面的な敗北の原因は明らかにならない

のではないか、ということである。

第2に、早川氏は、「生産点主義」を忌避するように言っているが、氏の争議分析には、他の産業と全く異なる地下坑内の労働過程、そこでの具体的な合理化の実態の問題が、すっぱり抜け落ちているように思える。この部面の解明なしに、争議の内実には迫れないのではないか。たとえばかつて森嘉兵衛賞を受賞したこともある本会会員平井陽一『三池争議；戦後労働運動の分水嶺』（2000年、ミネルヴァ書房）が、生産現場での労使関係について詳細な分析をおこなっていることと対照的である。

第3は、早川氏は、結局炭鉱争議とその後経過を巧みに記述しているが、それを総括しているようには思えない点である。私が知りたかったことは、あの大争議を如何に総括するかであった。それは抽象的な総括ではなく、はっきり言って、ほぼ完全に敗北した争議を指導したミリタントで左翼的なNUM主流の、なかならずNUM委員長アサー・スカーギルの争議戦術、指導が正しかったのかどうか、完全に敗北した争議がどんなマイナス面とプラス面を生み出したのか、そもそも争議は、なぜ完全に敗北したのか、という問いにどう答えるかあった。残念ながら明快な答えをだしていないように思える。

問題のない著作はありえない。批評すべき点はたくさんあり、評価すべき点もたくさんある本書は、わが国で唯一のイギリスの炭鉱争議（1984－85年）のまとまった研究書として大きな価値をもつと断じて、本書が広く読まれることを期待したい。

4 事務局からのお知らせ

新会員紹介

高橋卓也 滋賀県立大学准教授。

専攻、環境経営、資源環境経済学、森林計画。

高岡秀俊 元鉱山会社勤務、静岡県伊東市在住。

劇団民芸の演劇のお知らせ

「マギーの博物館」、原題は、The Glace Bay Miners 'Museum.

公演日 4月5日～16日、昼の部13時30分、夜の部18時30分

場 所 紀伊国屋サザンシアター（新宿南口）、一般 6 3 0 0 円

「さてこの度、カナダの炭坑町グレース・ベイの労働者を描く舞台『マギーの博物館』を上演いたします。つきましては、鉱山研究会の皆様にご高覧いただきたく公演チラシを送ります。皆様ご観劇下さいますようお願いいたします。」と劇団民芸の方から手紙を頂きました（M）。

『ヤマの話聞く会』記録集 2 についてのお知らせ

釧路市立博物館学芸員の石川孝織会員から『ヤマの話聞く会』記録集 2 についての情報が送られてきましたので、紹介します。

内容

【ヤマの話聞く会】

「グリョックアウフ！海を渡った炭鉱マン」

お話 菅原繁・工藤曠（元太平洋炭鉱（株））

「昭和 2 9 年の教訓－太平洋炭鉱ガス爆発事故とその後－」

お話 金沢利平・酒田元（元太平洋炭鉱（株））

「ヤマを支えた女たち－太平洋炭鉱主婦会－」

お話 佐藤邦子・片桐美代子（元太平洋炭鉱主婦会）

寄稿「太平洋炭鉱主婦会の歴史から学ぶ」

西城戸誠（法政大学人間環境学部准教授）

【FMくしろ「ヤマに生きて」より】

照井茂幸（機械）・安田進（掘進）（元太平洋炭鉱（株））

価格 8 0 0 円

購入方法

1、切手 8 8 0 円を下記に郵送。

〒0 8 5－0 8 2 5 北海道釧路市千歳町 1 1－1 4－A 石川孝織

2、ゆうちょ銀行で 8 8 0 円を下記あて送金。

記号 1 0 1 3 0 番号 2 1 6 6 4 8 7 1 イシカワタカオリ

萩慎一郎『近世鉱山をささえた人びと』（2 0 1 2 年刊、山川出版社、日本史リブレット、8 0 0 円）

元本会会員の萩慎一郎さんから上記の本が筆者に送られてきました。氏の大労作『近世鉱山社会史の研究』（1 9 9 6 年、同朋舎）を平易にした読み物で、とくに友子や鉱夫の争議について記述が興味深い（M）。